

令和元年度第4回宮崎県社会教育委員会議

【議事録】

令和2年2月5日（水）

午後2時25分から午後3時45分まで

宮崎県庁4号館4階委員会室

- 議長 まず、就学前における地域の子育てについてどのような取組がなされるとよいかについて意見を伺いたい。
- 委員 ○○市では、ブックスタート事業として、医療機関と連携して検診時に本を渡す取組を行っている。
- 委員 学校関係者や家庭等、教育に関して、自分の責任を他に押しつけているように感じる。行政のサービスがなくても家庭で教育できることが基本ではないか。
- 委員 幼児教育においては、幼稚園教育要領等があるのだが、小学校教育の前倒しと考えられているところもあるようだ。幼児期は好きな遊びを通して学びを得るものであり、教育に携わる者は、幼児期に大事なものを理解することが大切だと思う。
- 委員 地域における社会教育を考えた時に、園や施設だけに特化するのではなく、家庭や地域で教育の中核が担えればよいと思う。宮崎に来た時に、家庭教育サポート・プログラム（以下サポ・プロ）を知った。家庭教育支援は、小学生以上の保護者対象に必要だと考えられがちであるが、サポ・プロには幼児期や孫育てに携わる人等、親育ちの人たち対象のプログラムが設定されている。しかし、学校や園、PTAがサポ・プロの機能を十分に引き出すには限界があるように思える。だから公民館やサークル、保健福祉部局との関わりから低年齢児の保護者に対して、プログラムを活用していくべきだと思う。
- 議長 今、家庭教育の話も出てきている。家庭教育支援の取組について意見をいただきたい。
- 委員 基本的なことをまとめた子育て10か条を家庭に配布しているが、実際に活用を図っていくことが課題である。県PTA連合会のホームページに掲載して周知を図ったり、県内の小中学生から応募したイラストを掲載し、親しみを感じられる工夫をしたりしている。
- 委員 ○○町では学校内で合同の家庭教育学級を開催している。今、メディアの問題が挙がっているため、メディアを中心に上げた家庭教育支援に取り組んでおり、必要に応じてサポ・プロの活用を図っている。家庭教育学級では集まる人が固定しているため、町の教育講演会や各学校の学校保健委員会等多くの会でメディアについて取り上げて考えてもらっている。
- 委員 大学においても学生が権利について主張するが、責任をとらない、何かあると保護者が出てくるという状況が見られる。様々な教育のツールをつくっているが、実際に行動変容にまで至っているかを検証していく必要がある。家庭教育についての講演を行った時に、これを機に子どもたちが変容してくれることを期待しながら、心のつながりという視点をもって話をしてきた。
- 議長 学校において各学級の家庭教育委員による会を開いても、家庭教育委員以外の人には集まらないし、その伝達が十分に図られているとはいえない。
- 委員 家庭教育委員にとどまらず、いかに伝達していくか、機会をどう設けていくかが課題である。

議長	県メディア安全指導員として、就学時の研修で話をした時、保護者から資料を請求された。メディアについての研修等は、保護者の関心も高いので、就学前に必要だと思った。
委員	幼児期の発達の段階に応じて参観日等に大切なことについては啓発を行っているが、参加する人は固定されている。参加しない人をどう引き込んでいくか、または必ず参加しなければならない会と連携して、機会をとらえて教育していく必要があると考える。
議長	少年教育の充実について意見を伺いたい。
委員	今、IT化の進展により直接体験活動の機会が減り、間接体験が増えてきている。ニュースでもゲーム依存によるゲーム障害について取り上げており、ある県ではネット使用時間を条例化することを報道していた。今の保護者世代も体験活動に十分に取り組んでいるとはいえない。保護者世代は直接体験が大事だと思いつつも、その経験が少ないため、よさが分からず、子どもはスマホ依存になっている現状がある。親子一緒に体験して、直接体験のよさを共有できる機会を設けていかなければならない。県内には3つの青少年教育施設があり、幼児の体験活動の場をつくるとともに、保護者も関わってもらおう仕掛けをしている。
委員	現在、教育課程上、小学校における宿泊を伴った体験活動の時間短縮が進んでいるので、施設側も働きかけをしていかなければならない。
委員	農業体験や農家泊に携わる中で、都会からの修学旅行生と農業の話をした時に、経済上の損得の観念からしか、物事を考えられない子どもの実情を見てきた。大人としてはもっと積極的に子どものために働きかけることが必要ではないか。
委員	現在、乳幼児親子合宿という生活体験学校に関わっている。保護者の理解がないと進められない取組なので、保護者の関わりに二極化が見られる。保護者に価値観があると生活体験学校に申し込み、子どもの体験は豊かになるが、価値観がなければ申し込まない。体験の意義を見出してもらうため、0～1歳児の保護者の育休期間を使って、親子合宿を行った。1家族に1人スタッフを配置するような合宿を試験的に行っている。様々な体験を一緒に行い、学びを得るとともに、人とのつながりができたことは、その後の体験活動への積極的な申込みにつながっていくといえる。このように乳幼児の保護者が体験して学ぶことに可能性を感じている。
委員	青少年教育施設でも乳幼児と保護者一緒にした研修を設けていただくと、小・中学校までつながりが出てくるのではないだろうか。
委員	食育に関心をもつ消費者は2割ほどであり、逆に全く関心のない保護者も2割いる。残りは、知識では食育の大切さが分かっているが、行動に移せない人々である。何とかして意識を引き上げられる人々は何割くらいであるだろうか。
委員	若くして出産して子育てをしている保護者の意識を変容させていくことは大切だと思っている。関心や意識の低い保護者でも学びの機会により、変容が見られている。保護者よりも子どもの学びは著しい。そこに社会教育の重要性を感じている。
委員	なかなか変容が見られない保護者もいるが見放さずにやっていくのが教育だと思う。一律、満足する教育を提供することは難しい。意識の高い人やあまり関心の高い人等、対象者を決めて教育することが大切である。
委員	役割分担をしたり、協力して作り上げたり、コミュニケーションをしたりするような仕掛けをしたグループエンカウンターの後には、達成感を味わわせるような仕掛けをしているところがある。そのような経験をした子どもたちは野外活動で役割分

担をして、活動をやり遂げることができる。このように具体的な活動を通して、教育する仕掛けが大切だと思う。

議長  
委員

青年・成人教育について意見を伺いたい。

〇〇市では15の地区で行われる成人式の実行委員会に、新成人に替わり、保護者が出てくる。成人式当日も新成人以上に保護者の数の方が多い。このような状況に対し、まちづくり協議会はどのような方向にもっていけばよいか模索している。

委員

今、30歳を控えた人たちを対象にした三十路式の発足に関わっている。仕事や子育てに関わり、いろいろな生き方を考える立場になり、改めて地域を見直すことが大切だと考えている。地域からの注目や愛着があるが、いかに20代後半の人たちのやる気を導き出すかが課題である。

委員

20歳という区切りで本当に自立できているだろうか考える。10歳の時に小学校で実施される2分の1成人式は、成人を見据えた半分の時期に、将来の自立に向けた意識付けや大人になることについて考える機会になっている。昔の20歳が、今の30歳にあたり、大人になる猶予期間が延びているのではないだろうか。だからこそ、生涯学習・社会教育の立場から成人式を深刻にとらえていく必要がある。青年期について研究をしている人から、成人になることとは、青年団や消防団の一員になる等、新しい役割を担うことで地域からの祝福を受けたり、地域から認められたりすることであるという話を聞いた。単に、年齢が20歳に達しただけで、地域から認められる場がないため、地域の一員として実感する機会がなく、若者が自立しきれていないのではないだろうか。

委員

ボランティア活動を通して地域の人との関わりを味わってほしい。科目修得や内申書に記載するためのボランティアに留まらず、ボランティア活動で人とふれあい、人とどう関わっていくかを考えることができるとよい教育の場になる。思春期教育の研究の一環で中山間地域に関わっている。その場に学生を連れて行き、地域の小・中学生や地域の人々とふれ合う体験をさせてきた。直接ふれ合う体験をさせることは大切だと思った。その一方でボランティア活動に取り組みさせるだけで目的を果たしたととらえる現状に懸念を抱いた。

議長

最近の大学生は縦のつながりや関係を嫌い、部活動に入らない生徒が増えていると聞くが大学ではいかがであるか。

委員

当大学では、人数が少なく、いくつかの部を掛け持ちしている学生がいる。

委員

最近の学生は忙しいようである。出席の厳格性や評価に試験や提出物のPDF化により評価の妥当性を文科省に報告することからも学生には時間の余裕がないように感じる。

委員

ひと昔前は苦学生がアルバイトをしていたが、最近は遊ぶためやスマホ代支払のためにアルバイトをするなど、ひと昔前の状況とは一変している。

委員

生活時間の中に占めるスマホ操作の時間の割合が高くなり、地域と関わったり、ボランティア活動に取り組んだりすることは敷居が高くなっている感じがする。

委員

忙しい子どもほどボランティア活動に取り組んでいる。その姿を見て、「あの人は好きだからやっている」という人がいることに憤りを感じることもある。自分が所属する消防団で地域の若者の勧誘にいくと、25～26歳くらいの若者に代わって親が断るケースがあり、あきれたことがある。

議長  
委員

高齢者教育で意見を伺いたい。

年齢でいうと、何歳からが高齢者に区分されるのか。

委員 人生 100 年時代において 65 歳以上の区分でよいのだろうかと思うことがある。

委員 市や地区の組織に入らない高齢の方も多。このことは今の若者と同じである。

議長 公民館関係でも意見を伺いたい。

委員 自治公民館の存在は当たり前だと考えていたが、自治公民館のよさをもう一度見直す必要がある。加入率の低下が問題となっているが、人とのつながり等のメリットを積極的にアピールしていかないと加入率は上がらないと思う。

委員 生活をするために結婚するという考え方から、一人でも生きられるから結婚しないという価値観に変容していることは認めざるを得ない。公民館活動についても、公民館の組織に属さなくても生活している姿を見て、加入しなくてもやっていけると思ってしまう。本音で意義について語ることが望まれる。なくしてしまってからでは遅すぎる。

委員 P T A の組織をなくした後に、運営上の支障が多くなり、保護者会という組織を立ち上げたという話を聞いたことがある。どれだけ重要性があるのかを認識したり、共有したりできていないために起こってしまう問題だと思う。

委員 自分自身が公民館の会合に参加する時には、情報を交換しながら地区の未来を話し合う集落点検を行っている。その会合で地区の存続が危機的な状況に向かっていることを認識するとともに結束を強めることにつながった事例があった。会合で危機感を共有することは極めて大切なことだと思う。

委員 目先の利益だけにとらわれるのではなく、先を見据えてどうすべきなのかという視点で協議していく必要がある。

委員 昔は、生活のために集団で暮らしていたが、今はボタン一つで生活できる時代になり、人と人のつながることの価値が薄れてきている。人と人のつながりを再現させると考えられてきた災害時を考えても、隣や近所ではなく、ネットで遠くの人に助けを求める時代になってきており、人と人がつながる価値が後退しているといえる。人と人のつながりの価値を認識したり、共有したりすることは大切であるが、実際は難しい。

委員 地域に伝統芸能があったが、教える側の負担や伝承する人材の不足、伝統芸能を継続していく価値の喪失等からやめてしまったことがある。昔は伝統芸能をすることが楽しみであったのだが、現在はこのようにして消滅していつている。とても嘆かわしいことである。

委員 私の地区は昔からの集落でないため、伝統芸能をつくろうと同好会が立ち上げて活動をしている。

議長 太宰府の小・中学校に研修で行った際に、その地区は祭りに盛んであることを聞いた。中学生に企画や神輿担ぎに携わらせているため、大人になっても子どもの頃から関わってきた祭りのために帰ってくるそうである。

委員 大分県の宇佐では、実行委員会と学校と子どもたちも加え、共同体をつくり、4、5月の顔合わせから一緒に祭りの意義や歴史を学び、祭りや祭り後の発表を行うなど、社会に開かれた教育課程に則って進めている。子どもの参加意義が評価されると補助金等の支援がある上、外国からの評価は高いので、他者から見た価値を共有しながら、継続を図っていけるとよいと思う。

議長 多くの意見をいただきありがとうございました。